

# STUDIO REPORT

## 2024 - 2025



## 総合的に考え、つくる力の醸成

デザインを通して、新しい価値をどう生み出していくことができるか。流動的で不確実な時代において、あるべき社会の未来を構想し、そこに生じる課題を創造的に解決することができる高度なデザイン人材が今求められています。

宮城大学デザインスタディセンター（以下 DSC）は、宮城大学を中心として学生や大学関係者・地域の事業者・自治体が集い、共に学び、プロジェクトを展開する共創的な教育研究プラットフォームです。様々な専門性を持つ参加者が交流し、地域資源をデザインの視点から探索することを通して、その価値を自ら考え再評価したり創造したりするための活動を行なっています。

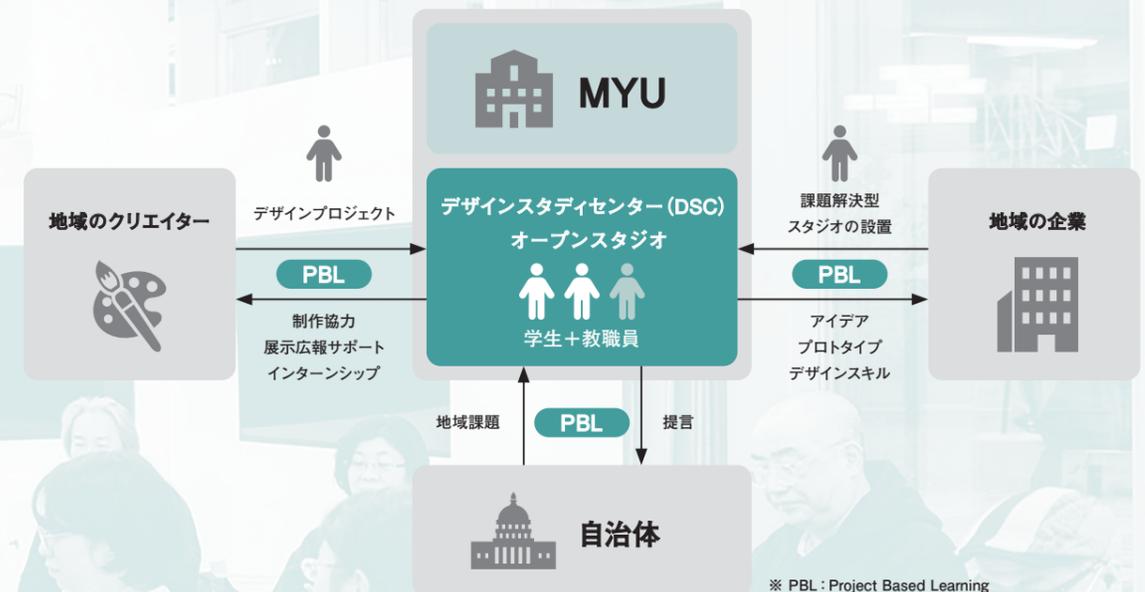
DSCは2020年度から活動を開始し、2024年度はオープンスタジオの開講、公開イベントの開催などを通して活動の幅を広げ、東北の新たなデザインの拠点となることを目指して活動を続けています。



DSC Webサイト  
<https://www.myu.ac.jp/dsc/>

## 地域に開かれた共創の場を目指して

大学・地域のクリエイター・地域の企業・自治体が集い、議論できる枠組みを2021年度から模索しています。これまでの4年間で6つの試験的なスタジオを開講。様々な分野の社会変革に携わる事業者やデザイナーをゲストとして招き、その考え方や実践方法を学んでいます。



## 幅広い層へ学びを提供

デザインや価値創造に関心がある学生・教職員・社会人・自治体職員等にもけてプログラムを開放。参加者の多様なニーズを満たし、オープンな議論を行うことで、コラボレーションを加速することができる機会を提供しています。

対象	学生	教職員	社会人	自治体職員等
メリット	学群・学年を超えた交流 ポートフォリオの充実	最新トピックの吸収 学内連携	コラボレーションの促進 リカレント教育	地域課題の理解 地域課題の議論

## 2024年度の DSCスタジオ

2024年度のスタジオでは、デザインを主軸としたこれからの街や工芸のあり方の探索と、価値の再評価・創造に取り組みました。

STUDIO1『未来の記憶を描く<青葉通り編>』では、お店の提案という課題を通し、街に対して何かしてみるという視点を持つことで、見慣れた街でも全く異なるレイヤーや切り口が見えてくるという感覚を会得。

STUDIO2『Meet Roots, Make Seeds. - 過去からつなぐ、デザインの芽。- 』では「商工省工芸指導所」の歴史やデザインに触れ、背景を紐解きながら、様々な素材の持つ可能性を模索しました。

各スタジオでは、フィールドワークやプロトタイピングによる実践的な学びを実施。体験を通じて多くの気づきを得ることで新たな視点や発想が生まれ、それが次のアクションへと繋がることを実感しました。これらの学びが、より良い未来を築くための一歩となることを期待しています。

### SCHEDULE

本デザイン教育プログラムは、設定されたテーマに対して“デザインとは何か”という問いを投げかけ、問題提起と活動に取り組むプロセスを通して、学生・教職員含め“デザインについて考える・デザイン思考を理解する”ことを目的としています。



**[DSCデザインスタジオ担当教員]** 土岐 謙次 (事業構想学群 教授)、本江 正茂 (事業構想学群 教授)、佐藤 宏樹 (事業構想学群 准教授)  
貝沼 泉実 (事業構想学群 特任准教授)、小松 大知 (事業構想学群 特任助教)

## STUDIO 1 未来の記憶を描く<青葉通り編>



本スタジオのゴールは『2034年の大町のお店を提案する』こと。提案を通して、街を改めて多角的な視点で読み返し、実は街の中に隠れている面白さや可能性を再発見することが目的です。

対象となった仙台市内青葉通り沿いの大町エリアを実際に自分たちの足で歩き、歴史や現状を肌で感じ、ヒントをもらいながら、大町エリアの過去～現在、未来までを考える時間となりました。

### PROGRAM

2024年11月 9日(土) 第1回 レクチャ、フィールドワーク、グループワーク①  
2024年11月10日(日) 第2回 グループワーク②、プレゼンテーション

会場：第1回 Blank 地下1F イベントスペース  
第2回 大和キャンパスデザイン研究棟 1F オープンスタディ  
参加人数：合計17名 (事業構想学群 6名、学外者 13名)  
企画担当：貝沼 泉実 (事業構想学群 特任准教授)

### GUEST



**佐藤 正実 氏**  
風の時編集部 代表

仙台市出身。NPO法人20世紀アーカイブ仙台副理事長。「仙台の原風景を観る、知る。」をテーマに2005年「風の時編集部」を設立。大正と現代を比較する今昔地図帳『仙台地図さんぽ』や昭和時代の写真集『仙台クロニクル』等、これまで45商品を企画出版。2021年より、今昔写真をもとに若年世代がまちの魅力を新発見するアーカイブ事業「ここダネ!」に取り組む。



**田村 大 氏**  
Re:Public inc. 共同代表

神奈川県生まれ。幼少期を福岡県・小倉で過ごす。東京大学大学院学際情報学府博士課程単位取得退学。新卒で博報堂に入社後、デジタル社会の研究・事業開発等を経て、株式会社リ・パブリックを設立。欧米・東アジアのクリエイティブ人脈を背景に、国内外で産官学民を横断した社会変革・市場創造のプロジェクトを推進している。2014年、福岡に移住し、九州を中心とした活動に移行。2018年より鹿児島県薩摩川内市にて、「サーキュラーシティ」の実現に向け取り組んでいる。現在、九州大学、北陸先端科学技術大学院大学にて客員教授を兼任。

ACTIVITIES

# #01

## レクチャ、フィールドワーク、グループワーク①

初回はゲスト講師の田村氏、佐藤氏によるレクチャを実施。アイデアを発想する手法として、町の歴史や背景を学び、新たな視点で捉え直すことの重要性が語られました。後半ではフィールドワークを通じて知見を深め、大町エリアの過去・現在・未来を考察。街を取り巻く要素を深掘りしながら、2034年の店のあり方を探っていきました。

**実施日**  
2024年11月9日（土）  
**会場**  
Blank 地下1F  
イベントスペース

### レクチャ / -able Cityへ

講師：田村 大氏 (Re:Public inc. 共同代表)

田村氏からは、テクノロジーが人々の可能性を広げる都市「-able City」について、バルセロナやデンマークの事例とデザインパターンをご紹介いただきました。新たな可能性を見出すには、地域や時代を異なる視点で捉え直すことが重要であると言います。

それをふまえ、大町エリアの街歩きを通じて、仙台の未来をより豊かで魅力的にするような、都市をエンパワーする要素を見つけ出してほしいとの期待が述べられました。



### レクチャ / 未来の記憶を描く

講師：佐藤 正実氏 (風の時編集部 代表)

佐藤氏は、仙台の原風景を残すことをテーマとした「風の時編集部」を2005年に設立。その取り組みの一つである「ここダネ!」の事例をもとに、今昔写真を通じて見慣れた風景を新たな視点で捉え直す方法をご紹介いただきました。

更に、大町エリアの歴史をご説明いただき、街の記憶や土地の特徴と結びつけることで、そこに根付く何らかの要素から新たな店のアイデアを生み出すヒントが得られるのではないかと助言がなされました。

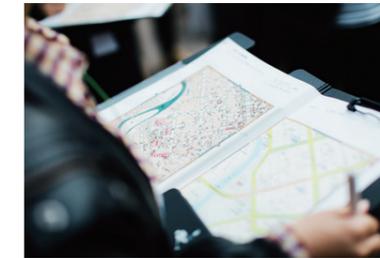


### フィールドワーク、グループワーク①

佐藤氏の引率によるフィールドワークでは、御譜代町の入り口である看板塔を起点に、魚屋の町であった肴町公園や、城下町の中心交差点であった芭蕉の辻など、歴史的に重要な地点を巡り、古写真と現在の姿を比較。戦前の商業の中心地であった幾つもの名残を見つけるとともに、現在の街の姿をどのように捉えるかを考察しながら、その歴史や背景を深く学びました。

その後のグループディスカッションでは、参加者が気づきを共有し、初期アイデアを検討。これを元に、大町エリアの過去・現在・未来を踏まえながら、店の種類や選定理由を具体化していきます。

初日の総評では、田村氏からは具体的な検討を進める際にグローバルな動向を考慮することの重要性が語られ、佐藤氏からは現在芭蕉の辻エリアで進められている活性化活動との連携の可能性について提案がなされました。



大町エリア / 大町〜一番町3丁目周辺

伊達政宗の時代から青葉城の城下町として栄え、特に商業の中心地であった芭蕉の辻を擁するなど、仙台にとって歴史的に重要な場所です。今回は主に右図のエリアをターゲットとしました。



ACTIVITIES

# #02

## グループワーク②、プレゼンテーション

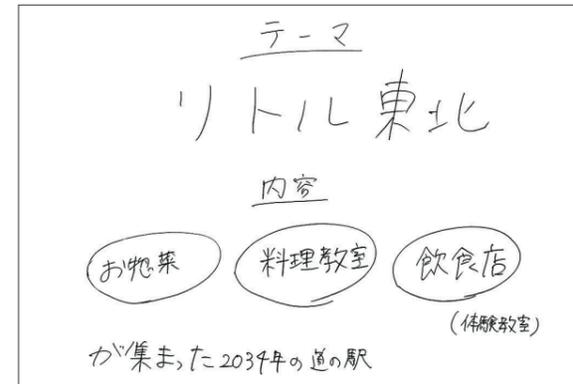
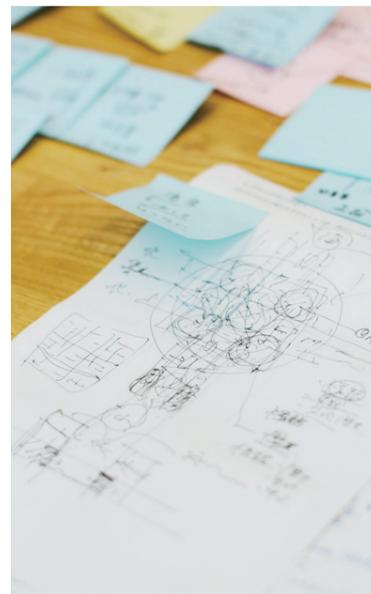
2日目は、アイデアのブラッシュアップと発表を行いました。様々な案が出揃ったなかで、ゲストと担当教員からは、どのグループも従来の物販に留まらず、土地の文脈や意味を未来に活かそうとしている点が評価され、今回生み出された案が10年後にどれだけ立ち現れているか楽しみにしたいとの言葉で締め括られました。

**実施日**  
2024年11月10日 (土)

**会場**  
大和キャンパスデザイン研究棟  
1F オープンスタディ

### グループワーク②

初日のアイデアをもとに、教員を交えたグループワークを実施。店のターゲットや出店場所、取り扱う商品・サービスについて、10年後を想像しながら具体化を進めました。進捗発表では、店のコンセプトが固まりつつある一方、現在の街や店舗の枠を超えられていない点が指摘され、未来の予測をさらに深める必要があるとの意見も。限られた時間の中で、参加者は2034年の大町エリアと、そこにふさわしい店の解像度を高めていきました。



#### チームA アイデアコンセプト リトル東北

大町エリアのマンションの1階に「リトル東北」をテーマとする店舗を出店します。東北出身の住民が中心となって地域の食材や郷土料理を提供するほか、料理教室の開催を通して、住民同士の交流を促進。マンションの住民が生活を快適に営み続けるられることを最重要事項としました。



#### チームC アイデアコンセプト 交流拠点「はじまりが辻」

芭蕉の辻に交流拠点「はじまりが辻」を開設。コミュニケーションロボットが備えられた休憩所や、地域住民が主体的に利用・運営できる貸出店舗を設置するなど、市民が仙台の歴史と未来を創造するという方針のもと、特に高齢者が孤独を感じず、生きがいを見つけられる場所を目指します。



#### チームB アイデアコンセプト 「想い」をつなぐ

定年後のセカンドライフを模索しているシニアや、自分の可能性を再発見したいシニアを対象として、食材を新しい食べ方・組み合わせの仕方提供提供するライスバーガーを考案。食べ物や体験を通して過去を振り返り、未来への想いを発見・再構築できる場を目標としています。



#### チームD アイデアコンセプト 伊達なWorkShop

「伊達なWorkShop」は、芭蕉の辻の街路の構造を再構築したスペースです。仙台のアイデンティティを醸成する場として、仙台の素材や人材を集めて新しい商品やビジネスを生み出す「伊達ジェネレーター」の育成を通じ、多様な人々の交流と循環、進化を創出します。

STUDIO 2

# Meet Roots, Make Seeds.

## — 過去からつなぐ、デザインの芽。 —



かつて仙台市には「商工省工芸指導所」という国立の工芸・デザイン研究指導機関が存在していました。1969年の閉所まで数々の技術開発が行われており、日本のプロダクトデザインを牽引する役割を担っていた機関です。本スタジオでは「工芸指導所」の残した足跡や多様な素材に触れながら、これからの工芸・デザインについて考察を深めました。

### PROGRAM

2025年1月11日(土) 第1回 レクチャ①、  
グループディスカッション&ワーク  
2025年1月12日(日) 第2回 レクチャ②、プロトタイピング

会場：第1回 東北歴史博物館  
第2回 FabLab SENDAI - FLAT、ソシラボ  
参加人数：合計28名（事業構想学群 6名、学外者 22名）  
企画担当：小松 大知（事業構想学群 特任助教）

### GUEST



**高橋 孝治 氏**  
プロダクトデザイナー

1980年大分県生まれ。多摩美術大学生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻卒業。良品計画に12年所属し無印良品の生活雑貨のデザイン、防災プロジェクト「いつものもしも」を立ち上げる。2015年— 中世より窯業が続く日本六古窯の一つ、愛知県常滑市に拠点を置き地域の方々の生業や活動に伴走する。  
常滑市長三賞陶業展(42-45回) 審査員 2016—2018年 常滑市陶業陶芸振興事業推進コーディネーター 2017—2019年 六古窯日本遺産活用協議会クリエイティブディレクター 2022年 常滑急須「chanoma」グッドデザイン賞BEST100・グッドフォーカス賞 2023年 土を基礎とし領域を超えて繋がる集団「スベル」結成。  
2024年 京都芸術大学大学院芸術研究科准教授

### ACTIVITIES

# #01

## レクチャ①、グループディスカッション&ワーク

**実施日**  
2025年1月11日(土)  
**会場**  
東北歴史博物館

小松特任助教による商工省工芸指導所の説明に続き、高橋氏が自身のデザイン手法やものづくりへの向き合い方を紹介されました。その後、産業技術総合研究所から東北歴史博物館へ寄贈された工芸指導所の資料を鑑賞。形状や質感を確かめるだけでなく、その背景にある暮らしの風景や生活者の姿にも思いを巡らせる時間となりました。

### レクチャ/商工省工芸指導所とは

講師：小松 大知（宮城大学特任助教）

小松特任助教は、自身の取り組みの紹介を交えながら、工芸指導所の成り立ちや活動について説明しました。工芸技術の向上と産業振興を目的に設立された工芸指導所は、ドイツ建築家ブルーノ・タウト氏をデザイン顧問として迎えるなど、新たなデザイン技法や素材の導入にも尽力。その活動が日本のプロダクトデザイン分野に与えた影響を強調すると共に、多様で豊かな資源を持つ東北に設立されたことが多くの成果に繋がったのではないかと指摘しました。



### レクチャ/行為や痕跡からアイデアを考える・ヴァナキュラーなものづくり

講師：高橋 孝治 氏（プロダクトデザイナー）

愛知県常滑市を拠点とする高橋氏は、プロダクトデザイナー深澤直人氏との出会いを機にデザインの道へ。深澤氏からの指導で培われた、行為や痕跡の記録からアイデアのもとを探るというアプローチは、現在も重要なデザイン手法の一つだといいます。目に見えるものだけでなく、対象を構成する素材や歴史、背景を学ぶことが大切であり、それを意識してスタジオに取り組んでほしいと語られました。



商工省工芸指導所

現 宮城県仙台市宮城野区五輪1丁目4-22 付近

木工、漆工等各種工芸技術の産業化や、産業工芸による輸出の振興、東北の資源の活用と産業育成を図るため、1928年に設立された研究指導機関。全国から木工、金工、漆工、デザイン等におけるトップレベルの技術者が集められ、デザインや素材、製造方法だけでなく、塗装方法や梱包方法まで幅広く研究を行っていました。

東北歴史博物館

985-0862 宮城県多賀城市高崎1丁目22-1

東北歴史博物館は、東北地方全体の旧石器時代から近現代までの歴史が展示されている県立の博物館です。東北の姿の再発見と存在の発信を通して、地域づくりと活性化にも取り組んでいます。



グループディスカッション  
& ワーク

今回は、工芸指導所で実際に制作された当時の試作品資料を手に取り、その重さや質感、細かな造形を体感する時間も設けられました。東北歴史博物館様にご用意いただいたのは、主に工芸指導所の中期（1940年から60年代）頃に制作された30点以上の資料です。用途が明らかになっていないものも多くありましたが、参加者はその工芸技術の奥深さに感心している様子でした。その後のグループワークでは、現代の暮らしで使いたいものと使いたくないものをそれぞれ1点ずつ挙げ、それらをより「使いたいもの」にする方法について議論を実施。同じ資料でもグループごとに意見が分かれる場面があり、使い手の視点や想定する状況によって評価が変わることを実感する機会となりました。

最後に高橋氏は、ものの背景にある歴史や文脈を理解することの重要性を改めて強調し、翌日に予定されているプロトタイピングへの期待を述べられました。



ACTIVITIES

#02

レクチャ②、プロトタイピング

スタジオ2日目は高橋氏のレクチャからスタート。素材の特性や加工法に加え、歴史的背景を掘り下げながら土を活用する事例を通じ、参加者は素材との向き合い方を学んでいきました。その後、各自が持ち寄った素材に触れ、特性を五感で体感しながら活用方法を模索。背景を紐解き、加工実験を重ねることで、新しいアイデアが生まれる過程を実際に体験する機会となりました。

実施日

2025年1月12日（日）

会場

FabLab SENDAI - FLAT、ソシラボ

レクチャ／土を使ったものづくりとその背景

講師：高橋 孝治氏（プロダクトデザイナー）

レクチャでは高橋氏が実際に使用している土（焼き物の原土）に触れながら、その加工方法や背景にある文化を紹介されました。高橋氏は土を焼き物の素材としてだけでなく染め物にも使うなど、広く原料として捉えており、その土地の土を用いることは、環境や歴史を反映し、地域の人々に学び合いの関係を生むと考えられています。今回のプロトタイピングにおいても、各素材の背景を紐解きながら取り組むことが大切だと助言されました。



参加者による素材の紹介

本ワークショップでは、「普段は触れる機会が少ないが、身近に存在する素材（原料や材料）」を1つ選び、その情報を各自でリサーチすることが事前課題として提示されていました。これに対し、参加者は多種多様な素材を持ち寄り、それぞれの用途や歴史、背景について発表。素材に関する情報を共有することで、新たな視点が生まれるとともに、日常の中で見過ごしていた素材の価値や可能性について改めて考える機会となりました。



紙紐やロウ、コルクなどの馴染みのある素材だけでなく、コンゴ共和国で作られている植物製の布といったユニークな素材も。



幼少期の原体験やエコシステムの構築、新たな産業の創出など、ものづくりの材料にとどまらず、様々な視点で素材が選択されていました。

参加者が持参した素材

ヨシ／ロープ（ヨット用ロープ）／笹の葉／箸（うめーし）／桑の葉／シルバー925／ロウ／クバクロス（植物等を材料とした布）／にかわ／炭／石膏ボード（建材）／コルク／紙紐／パイライト／すすき／竹／胡粉／アスファルト／チョーク／スタイロフォーム

**FabLab SENDAI - FLAT**  
980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町2-2-8  
シエロ南町4F-1



「ものを作るための場所」としてだけでなく「何か面白いもの・ことと出会う場所」を目指して活動しているものづくりスペースです。

**ソシラボ**  
980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町2-2-8  
シエロ南町10F-1

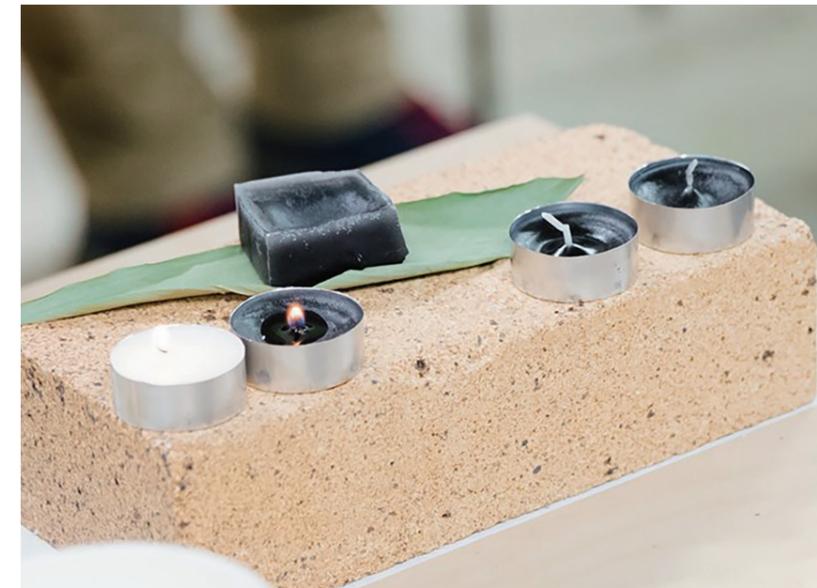
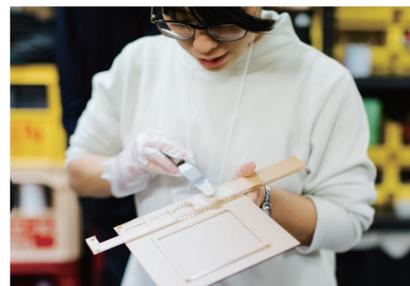


仙台市のワーキング&イベントスペースです。色々な人を巻き込み様々な実験をする場所として、東北からの新たな価値の創造を目指しています。

## プロトタイピング

参加者は持参した素材を手に取り、その背景を深く掘り下げながら、様々な加工実験を実施。更に、そこで得た知見や気づきをもとに、新たな活用方法についても検討を重ねました。

全体の総評では、高橋氏は「歴史や足元を見つめ直し、五感を活かして体感することで理解が深まり、行動に変化が生まれる」と述べ、土岐教授は「実際に試すことで初めて分かることがあり、成功や失敗を通じて次の行動につながる」と振り返りました。



(左) 木炭とロウを混ぜて作られたろうソク 型紙の凹凸がろうソクの表面に転写されたという面白さから、質感の類似性を活かすことで新たな用途が見出せる可能性が感じられました。／(右上) 樹脂製の骨組みに紙紐を編み込んだオブジェ 高橋氏からは、紙紐を開いた際のシワやボリュームも活かしてみてもどうかとの提案が。／(右下) ケヤキの葉型を彫刻したスタイロフォーム 葉の形や光の陰影をより抽象化することで、新たな表現手法が生まれる可能性があるのではないかと意見も。



(左) ロウ引きした紙 様々な素材へのロウ引き加工やロウでの模様付けなど、今後の展開に期待する声も。／(右上) にかわで固めたアスファルト アスファルトを単なる道路の素材と捉えず、活用を模索した視点に評価が。／(下中) にかわを塗ったチョーク製のボード 作者は、自らの手で感触を確かめながら作ることがものづくりの本質であると改めて実感したと言います。／(左下) にかわに胡粉や土を混ぜた顔料 配合比の違いによる質感の変化から、新たな表現への発展に期待が。



宮城大学デザインスタディセンター  
STUDIO REPORT 2024-2025  
2025年3月31日発行

[編集・発行]  
宮城大学デザインスタディセンター  
[デザイン]  
合同会社 FLAT  
[撮影]  
株式会社 フロット



DSC Web サイト  
<https://www.myu.ac.jp/dsc/>